比喩表現に込められた感情情報の伝達特性

○小島隆次¹・岡 隆之介²・楠見 孝²

(¹滋賀医科大学・²京都大学大学院教育学研究科)

キーワード：比喩・感情・コミュニケーション

How Much Feeling Does Figurative Language Convey to You?

Takatsugu KOJIMA¹, Ryunosuke OKA² and Takashi KUSUMI²

(¹Shiga Univ. of Medical Science, ²Graduate School of Education, Kyoto Univ.)

Key Words: Figurative language, emotion, communication

本研究の目的と概要

比喩表現が主観的感情を表現するために使われる際には、感情強度が高くなるほど使用頻度が上がる（Fainsilber & Ortony, 1987; Fussell & Moss, 1998）や、自分自身の感情状態を表現する場合には言語表現経験の程度に関わらず比喩表現が多く出現すること（Williams-Whitney et al., 1992）などが示されている。また、Robert & Kreuz (1994) によれば、送信者が受信者に対して、伝達したい内容を正確に伝えることを目的とした場合には、比喩、特に直喩が、比喩的表現の中でもっとも使用されることが示されている。こうした事実から、多くの人にとって比喩表現は主観的感情状態を他者に正確に伝達する目的で使用されるものであることが推察できる。しかし、これまでの感情表現のための比喩使用に関する実証的研究では、感情表現のために用いられた比喩が実際にどの程度送信者の意図通り受信者に伝わるのかという点を検討していない。比喩が他者に感情を伝達するための重要で有効なコミュニケーションツールとして用いられるためには、送受信者双方が比喩に込められた感情情報をどのようにとらえるのかを明らかにする必要がある。そこで本研究では、この点を探索的に検討するために感情の汎用的分類モデルである感情円環モデル（Russell, 1980, 1989）を参考に、特定の場面について快適性と活動性の程度が最も低い状態を表現する比喩表現を収集し、この比喩表現から感じ取れる比喩表現作成者の感情状態を実験参加者が円環モデルの二軸（快適性・活動性）に従って評定するという実験を行った。

方法

実験参加者：大学生 36 名が参加した。この実験参加者は全員以下の言語刺激選定のための調査には参加していなかった。

言語刺激：事前の調査で大学生・大学院生 119 名から収集した比喩表現を含む 476 文の中から選択した。本研究の実験で使った比喩表現は、この事前調査において「高校・大学時代の授業の中で最も退屈だったものを、たとえ表現を用いて説明してください。但し、その表現で大多数の人に、あなたが伝えたいことが伝わるものにしてください」という条件の下で作成されたものから選出した。これは、今回の実験においては、刺激として使用する比喩表現全てについて、各比喩表現の作成者にとって後述の感情評価ラベルにおける快適性と活動性が最も低いものに該当する表現を選出する必要があったからである。さらに、喩辞部分の形式を揃えるために「1つの修飾部と1つの単語」の組合せで構成されているものという基準も採用した（例「回らない観覧車」）。選出した比喩表現から重複するものなどを除き、最終的に 31 文を実験刺激として選出した。

装置：実験は LimeSurvey を使用したインターネット実験形式であり、web ブラウザ上で行った。

手続き：実験参加者は回答に関する注意などの教示を受け、その後回答方法に関する練習を行い、本試行に取り組んだ。実験参加者は、授業に関する個々の比喩表現を読み、その比

喩表現から主観的に感じるその授業の快適さの程度を【-2：とても不快・気分が悪い～2：とても快適・気分が良い】の5段階で、また、主観的に感じるその授業の活動性の程度を【-2：とても静か・落ち着いている～2：とても活動的・勢いがある】の5段階で評定することが求められた。個々の比喩が表現している授業は全てが別個独立のものとした。また、比喩は全て直喩形式とした。

結果と考察

全刺激文の快適性と活動性に対する実験参加者の評価結果の分布を示したものが図1である。図中の円の大きさは各感情評価値の回答頻度を示す。実験刺激の全比喩文は「快適性と活動性が最も低い」という作成者の主観的感觉を伝える目的で作成されたものであるため、実験参加者が作成者の比喩に込めた感情を完全に推定できれば、図1の第3象限内の快適性も活動性も最も低い点（左下の赤みがかった円）に評価が集まる。しかし、この点の回答度数は全体の約6%であった。そこで、第3象限内にある推定値、すなわち感情強度は考慮せず感情系統が類似の範囲という基準であれば回答度数の比率は全体の約29%となり、さらに各軸上の負の範囲も含めた場合の回答度数の比率は全体の55%となった。また、実験での快適性と活動性の推定誤差距離の平均値を、本研究で設定した理想値（快適性が-2で活動性も-2）を原点とした感情円環モデル平面上のユークリッド距離で求めると2.42であった（ $0 \leq \text{推定誤差距離} \leq 5.66$ ）。

以上から、比喩による感情情報の伝達においては、感情の種類を推定する場合には送受信者間での齟齬は比較的小さいが、感情の強度を推定する場合には受信者から過小評価される傾向にあることが推測される。また、この推測と、感情強度と比喩の使用頻度には正の相関関係が見られるという報告（Fainsilber & Ortony, 1987; Fussell & Moss, 1998）から、比喩表現の受信者が感情の強度を意図的に過大評価することを心がければ、送受信者間の感情伝達の齟齬が軽減されることが期待されるだろう。

図1. 実験での全比喩文に対する感情情報推定の結果